

『厚嚴經』と『大乘密嚴經』

北 尾 隆 心

はじめに

『厚嚴經』という經典は、法相宗の根本論典である『成唯識論』の所依の經論とされる六經十一論の内の一つである。

しかし、『成唯識論』の中においては『厚嚴經』という經名は一切見出すことはできないのである。

では何故に、『厚嚴經』という經典が『成唯識論』の所依の經論の一つとされるかというと、それは慈恩大師窺基（六三二～六八二）が『成唯識論述記』において『成唯識論』の中に引用される六つの伽陀を『厚嚴經』の伽陀として註記されたことによるのである。

そして、この『厚嚴經』と『大乘密嚴經』（以下『密嚴經』と略す）とが一般には同本とされているのである。

この両經の同本説は、真興（九三五～一〇〇四）の『唯識義私記』の中において、『厚嚴經』と『密嚴經』とは同本であると記載されたことによっている。

印度學佛教學研究第四十二卷第二号 平成六年三月

この説については、権田快寿氏・勝又俊教氏等により『成唯識論』の『厚嚴經』とされる伽陀と『密嚴經』の漢訳、及び、チベット訳の比較によって確認されている。

本稿においては、真興が『唯識義私記』において『厚嚴經』と『密嚴經』とが同本であるとされたその根拠について若干論じることとする。

一 真興撰『唯識義私記』

この真興の『唯識義私記』とは、慈恩大師の『大乘法苑義林章』『唯識義林』（以下『唯識義林』と略す）の註釈書である。

『唯識義私記』に、『厚嚴經』と『密嚴經』との同本とする説が記載されているのであるが、それは『唯識義林』の「厚嚴經云。心意識所縁皆非離自性。故我一切唯有識無余。」⁽³⁾という文の注釈の中においてであり、「此經西方有梵本未翻譯。唯識論第七引此經文。章主依此引為証。」⁽⁴⁾とし、『厚嚴經』は翻譯されていないとする。しかし、この後に割註を付し、

『厚嚴經』と『大乘密嚴經』（北尾）

一一四

「泰法師仏地疏云。法師持梵本來。若翻可得五六卷許。然未翻也。義演云。密嚴經是同本也。云々」⁽⁵⁾

とされ、義演の説を出し、『厚嚴經』と『密嚴經』とは同本であるとされるのである。

これ以降の註釈書等はすべてこの真興の割註の部分を踏襲しており、『厚嚴經』と『密嚴經』とは同本であると解しているのである。それは、湛慧（二六七五—一七四七）の『成唯識論述記集成編』巻第十二や基弁（一七八一—一七九一）の『大乘法苑義林章師子吼鈔』巻第七等に見ることができる。

真興の『唯識義私記』では、義演の『密嚴經』と『厚嚴經』とが同本であるという説を引いているが、真興以前の註釈書等においては、そのほとんどが『厚嚴經』の経名は示しているものの『密嚴經』と同本とする解釈は一切見当らないのである。それ故に、この真興の『唯識義私記』における割註の引用は真興の卓見とも言えるものである。

この真興の卓見ともいうべき前述の「義演云。密嚴經是同本也。」⁽⁸⁾というところであるが、これが如何なるものからの引用であるかについては、今日、全く明確にはされていないのである。

それ故に、古くより「義演」の部分を「義演」とする写本も存するのであり、東大寺所蔵新律院本『唯識義私記』の写本の一本⁽⁹⁾においては、「義演」というところに異本では「義

演」であると註されているのを見ることが出来る。また、湛慧の『成唯識論述記集成編』においても、「義演云。密嚴經是同本也。」⁽¹⁰⁾とあり、この部分を「義演」としているのである。

今日に至っても、権田氏、及び、勝又氏等は「義演」の部分をどの様な根拠によるものか「義演」とされているのである。

二 「義演」とは

では、この「義演」とは何を指すのか。

権田氏は、

「熱るに其の密嚴經の翻訳を見たる義演は密嚴經と厚嚴經とは全く同本であると唱え初めた。そして爾來義演の考え方が学派として証認された如く、……[略]……と云ふ義演の言葉を一先ず認めるも、何故に両經は同本なりやと、その所以も詮索することになると義演の述べる所は、まことに簡単にして、我々はそこから何等の理由をも見出すことができないのである。」⁽¹²⁾

と述べておられるように「義演」を人名とされているのである。

しかし、真興の『唯識義私記』の中に現われる「義演」とは、人名ではなく、『成唯識論疏義演』という論書である。

『唯識義私記』には、「義演云」もしくは、「演云」として

現われる箇所が、二四箇所あるが、例えば、『密嚴經』と『厚嚴經』とを同本とすることを述べた文に続く中に「義演云」が現れており、その文を示すと、

「問。此疏文意何。答。義演云。疏中解上二句有二解。一云。心意識所緣。此所緣者即是第八識上見相分。皆非離自性者即是八識自体分。意說。所緣見相分皆不離識。自体分之自性也。故疏文云。即緣識之体者。意云。緣識即是見分也。体者即自体分故。見分是識体上用。即是自体分緣見分。此見分不離自体分也。言或事性者。事之言境事。即是相分。此相分不離識。自体性故言性也。二云。其真如理体即是義之所依本事。本事即是体事也。義者即是余有為法也。真如名真実心也。云々」⁽¹³⁾

とある。

これは『成唯識論疏義演』卷十四の、

「疏心意識所緣皆非離自性者。疏中解上二解。一言。心意識所緣。所緣者即是八識上見相分。皆非離自性。自性者即是八識自体分。意說。所緣見相皆不離識。自性分之自性也。故疏文言。即緣識之体者。意言。緣識即見分。体者即自性分。緣見分故見分。是識体上用。是自性分緣見分。見分不離自体分也。言或事性者。事之言境事。即是相分。相分不離識。自体性故言性也。二言。其真如理体即是義之所依本事。即是体事。義者即是有為法也。故真如真実心也。」⁽¹⁴⁾

とほぼ一致するのである。

『厚嚴經』と『大乘密嚴經』（北尾）

このように、真興の『唯識義私記』の中の「義演」とは人名ではなく『成唯識論疏義演』を指しているのである。

しかし、『成唯識論疏義演』の中には前述の「密嚴經是同本也。」⁽¹⁵⁾という一文を見いだすことはできないのである。

また、『成唯識論』に引用されている『厚嚴經』の六偈の内、『成唯識論疏義演』において積されているのは二偈であるが、その部分では偈自体の積のみで、出典等については何も論及されていない。また、『厚嚴經』の経名が現れている二箇所においても『厚嚴經』として扱われているのみで、『密嚴經』と同本する解釈は存在しないのである。

これらのことより、前述の「密嚴經是同本也。」⁽¹⁶⁾という一文は明らかに「義演云」ではなく、「義演云」である。

三 「義演」とは

では、「義演」とは、人名及び書名の内、何を指しているのか。

真興の『唯識義私記』の中には、このほかにも「義演」のものとしては四十箇所の引用が存しており、そして、それは「義演云」のほか、「演云」、「演師云」、「義演三身章記曰」、「義演釈章文云」等というように出てくるのである。

つまり、これらより明らかに「義演」とは人名を指しているのである。

では、「義演」とは如何なる人物であるのか。

この「義演」という人名を真興の時代以前に搜すと、『宋高僧伝』の中に二度出てくるのであり、それは「曇一伝」⁽¹⁷⁾において曇一（六九二～七七二）の弟子として現れ、そして、『靈祐伝』⁽¹⁸⁾においては靈祐（七七二～八五三）の師匠として出てくる。

これより義演が活躍したのは七〇〇年後半より八〇〇年前半であることがわかる。

また、結城令聞氏の『唯識学典籍志』⁽¹⁹⁾においては「義演」の著作として『成唯識論掌中樞要記』二巻という唐代選述のものがあつたことが記されている。しかし、この書は今日伝わっていないのであり、そこに「密嚴經是同本也。」⁽²⁰⁾という文が存在するかどうかについては現在知ることはできないのである。

ただ、これらより推し量ると、七〇〇年後半より八〇〇年前半に活躍した『成唯識論』に精通した「義演」なる人物が存在したことがわかるのであり、この人が、真興の『唯識義私記』において、『厚嚴經』と『密嚴經』とを同本とした「義演」なる人物であるという可能性が生じてくるのである。

しかし、真興以前にはこの義演の「密嚴經是同本也。」⁽²¹⁾という一文の引用は全くなく、また、『厚嚴經』と『密嚴經』とを同本と見るといふこともなされなかったのであり、つま

り、真興が引用したということによって『厚嚴經』と『密嚴經』との両経が同本という説が、一般に承認されることとなつたのである。

おわりに

古くより定説とされている「『厚嚴經』と『密嚴經』との両経は同本である」ということについては、今日、権田快寿氏や勝又俊教氏等により確認されているが、この説の発生については真興の『唯識義私記』を最初とするのである。しかし、その中の「密嚴經是同本也。」⁽²²⁾という引用文が何よりの引用であるのかということについては全く論じられてこなかったものであり、権田氏や勝又氏のように両経を同本であるということを確認された方すら、無確認に「義演」を「義演」と書き換えておられるのである。

これは写本等により、その部分が「義演」、「義演」の二種存することによるものと思われるが、『唯識義私記』における「義演」とは、権田氏の説のように人名ではないのである。『成唯識論疏義演』を指すのであるが、その中においてはこのような「厚嚴經」・『密嚴經』両経を同本とする解釈は全く存していないのである。

つまり、このことより明らかにこの部分は「義演」ではなく、「義演」であることがわかるのである。

そして、この「義演」とは『唯識義私記』の他の部分より人名であることがわかる。

つまり、「密厳経是同本也。」⁽²³⁾という一文は、「義演」(『成唯識疏義演』)のものではなく、「義演」という人物の述べた文であることを確認するに至ったのである。

そして、「義演」については、今日、七〇〇年後半より八〇〇年前半に活躍した『成唯識論』に精通した「義演」なる人物を確認することができるのであり、『唯識義私記』の中に現れる「義演」である可能性を認めることができるものの決定に至る明確な根拠に欠けるのであり、推測をでないのである。

今後、更なる研究の必要性を認めるところであり、このことが明確になることにより、真興の『唯識義私記』の研究が一步前進するものと思う次第である。

1 権田快寿「密厳経に就て」(仏教学第四輯)。

2 勝又俊教『仏教における心識説の研究』(第二章第二節七、厚厳経)(八四〇八七頁)。

勝又氏は本書において、『厚厳経』の偈と『密厳経』とを比較し、二偈が一致し、一偈が類似するとされているが、実際には、権田氏が云われている(前提書七二七三頁)ように一偈か一致し、二偈が類似するのである。

3 大正蔵四五卷二五八頁下。

4 大正蔵七一巻三三三頁下。

5 大正蔵七一巻三三三頁下。

『厚厳経』と『大乘密厳経』(北尾)

6 大正蔵六七卷二五四頁中以下。
7 大正蔵七一巻六〇一頁中。
8 大正蔵七一巻三三三頁下。
9 養和二年壬寅正月廿日写された興福寺沙門解脱上人貞慶の写本。

10 大正蔵六七卷二五四頁下。
11 権田氏 前提書 六四頁。

12 勝又氏 前提書 八四頁。
13 権田氏 前提書 六四頁。

14 大正蔵七一巻三三四頁上。
15 大正蔵七一・七九・三・三三四 右 上以下。
16 大正蔵七一巻三三三頁下。

17 宋高僧伝 卷第十四(大正蔵五〇卷七九九頁上) 註15同。

唐会稽開元寺曇一伝 略

18 門人越州妙喜寺常照建法寺清源湖州竜興寺神玩宣州隱靜寺道昂杭州竜興寺義賓(演)台州国清寺湛然蘇州開元寺弁秀潤州棲霞寺昭亮常州竜興寺法俊等。

宋高僧伝 卷第十一(大正蔵五〇卷七七七頁中) 唐大潑山靈祐伝

19 冠年剃髮三年具戒。時有錢塘上土義賓(演)。授其律科。及入天台遇寒山子於途中。略

20 結城令聞『唯識學典籍志』三三二頁上(三三四頁上) 註15同。

21 註15同。

22 註15同。

23 註15同。

〈キーワード〉 真興、『厚厳経』、義演

(種智院大学専任講師)